

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

下校途中、バスの中でどれかの携帯電話が鳴りだした。目覚時計のような音。わたしの前に座っていた男の子が慌てて鞆を探り、車内に響いていた電子音を消す。電話を耳にあて、そのまま会話を始めた。

暖房のせいで窓は曇り、外の風景は見えない。わたしはとりとめのない空想をしながら、ぼんやり車内を見回した。乗客は他に、通路をはさんで買物袋を抱えたおばさんがあるだけだった。携帯電話で話をする男の子に、彼女はそれとなく迷惑そうな顔をむけた。

複雑な気持ちだった。乗り物や店内で携帯電話を使用するのは人の迷惑になるかもしれないが、一方でそういった状況に対してあこがれにも似た気持ちを抱いていた。

男の子が電話を切ると、運転手がスピードカーを通して言った。

「他のお客様のご迷惑になりますので、車内での電話は控えるようお願いします」

ただそれだけの、何でもない出来事だった。それから十分ほど静かにバスは走り続けた。暖かい空気が気持ちよく、わたしは半分、眠りかけていた。

再度、電子音が鳴りだした。最初のうち、また前に座っている男の子の電話だと思った。わたしは無視して目を閉じていた。やがて様子がおかしいことに気付く、睡魔がふきとんだ。

鳴っている電子音が、さきほどのものとは異なっていた。今度のは和音のメロディー。聞き覚えのある映画音楽。偶然にもほろがある。わたしの想像していた電話の着信メロディーとまったく同じものだった。

だれの電話だろうか？

車内を見回して、電話の持ち主を探した。運転手、男の子、おばさん。バスの中には、わたし以外にその三人しかいなかった。しかし、だれも身動きせず、響き続ける着信メロディーに気付いた様子もない。

聞こえていないはずがない。不思議に思うと同時に、不安な気持ちになった。その時はすでに、予感していた。膝の上の鞆を、いつのまにかぎゅっと握り締めていた。鞆の取っ手につけたお気に入りのキーホルダーが、カタカタ小さな音をたてた。

おそろおそろ、視覚以外の機能で自分の頭の中を覗く。予感的中していた。想像で作り上げた白い電話が、何かの電波を受信して、着信を知らせるメロディーをわたしの頭の中にだけ流していた。

恐怖に近いものを感じた。こんなことはありえない。何かの間違った。

世界中のすべてがわたしを見捨てる、頭の中にあるこの通信機器だけは自分のそばから離れない。そう思っていたのに、電話がわたしの手を離れて勝手に歩きだしたような気分だった。

しかし、いつまでも電話を取らないでいるわけにはいかない。怖いからといって、この電話をどこかへ捨ててしまうことはできないのだ。頭の中の電話はわたしにとって、すでに何よりもリアルな存在になっていた。

おそろおそろ、イメージの世界にあるわたしの手が、本来は実在しない携帯電話を手に取り、さきほどから続いていた音楽を止めた。ほんの一瞬、躊躇した後、頭の中で白い電話に問い掛けた。

「あの……、もしもし……？」

「あ！ ええと……」若い男性の声。嘘の携帯電話の向こう側から聞こえてくる。「1」

彼は感嘆するようにつぶやいたが、わたしはそれどころではなかった。あまりのことに気が動転し、おもわず電話を切ってしまった。だれかのいたずらじゃないかと思ひ、バスの中を見回した。声の主らしい男の人は近くに見当たらない。乗客たちは、わたしの頭の中におかしな電話がかかってきたことにも気付かず、ただバスに揺られているだけだった。

どうやら本格的に、頭がどうかしてしまったのに違いない。

目的のバス停に到着した。運転手に定期を見せて、暖かい車内から凍えるような寒さの中へ飛び出そうとした瞬間、またあの音楽が頭の中で流れ出した。不意をつかれ、バスのステップで転びそうになる。

すぐには電話を取らなかった。心を落ち着ける時間が必要だ。バスがわたしを残して発車する。肺まで凍りつきそうな冷たい空気をシンコキュウすると、電話の応答に必要な「2」が少しだけわいてきた。

頭の中で携帯電話を手取る。

— 1 —

「もしもし……」

「切らないで！ 突然のことに驚いているだろうけど、これ、いたずら電話じゃないからね」と、さきほどの声。

いたずら電話という言葉が、不覚にも、ちよつとおもしろいと思つた。何か言わなければいけないと思ひ、わたしはおずおずと頭の電話に語りかける。トクイな状況に置かれたせいか、いつも他人と対峙している時に味わう苦しい緊張感もなかった。

「あのう……、何と言ったらいのか、わかりません。今、わたしは頭の中にある電話に向かって話しかけているのですが……」

「ばくも同じだよ。頭の中の電話に話しかけている」

「よく、わたしの電話番号がわかりましたね。電話帳に載せた覚えはないのですが」

「適当に数字を押したんだ。十回ほど挑戦したけど、どこにもつながらなくて、これであきらめて最後にしようと思つていると、きみのとこにつながった」

「一回目の時、つい切つてしまつてごめんなさい」

「いいよ、当然、リダイヤル機能がついてるから」

バス停から家まで、三百メートルほどの距離だった。③ 人気がなく、空は灰色の雲に覆われて薄暗い。立ち並ぶ民家の窓に明かりはなく、人がいるようには見えない。枯れかけた木々が細長い枝を風にゆらし、まるで手の骨が手招きしているようにも見えた。

マフラーに顔の下半分をうずめ、ゆっくり歩きながら、頭の奥から聞こえる声に注意を向けていた。

彼は野崎シンヤと名乗った。わたしと同じように、毎日、頭の中で携帯電話のことを考えていたそうだ。⑥ 想像で作り上げたはずの電話が、あまりに存在感があるのに気付く好奇心から電話をかけてみたのだと彼は説明した。

「信じられない……」

実際に声をだしてつぶやいた。自分以外にも、③ 変な人間がいたなんて。

我が家の前に到着すると、玄関の鍵をポケットから取り出す。

「ごめんなさい、何だか色々なことがあって、ゆっくり考えたいの。電話を切つていいですか？」

「うん、ばくもそう思つてた」

正直に言うと、久々にだれかと会話したことがわたしに充実感をもたらした。しかしそれ以上に、混乱させられてもいた。

頭の電話を切つて帰宅する。だれもない家は静まり返り、暗闇がぼつかり大口を開けているようにも見えた。いつもなら気にならないはずなのに、なぜか一人しかない家がうつろで恐ろしいものと思えた。急に寂しさが込み上げてきて、急いで居間や台所の電気をつけた。

コーヒールをいれて、コタツに入る。テレビをつけるが、見てはいなかった。

しばらくシンヤという人物について考えていると、彼は実在の人物ではないのではと思ひはじめた。携帯電話と同様に、わたしが頭の中に作り出してしまった虚構の人物なのではないか。きつと、心の底で話し相手を探している。たわたしが、無意識のうちにもう一つの人格を形成してしまつたのだ。

⑧ だれかの頭とつながってしまったと考えるよりも、その結論の方が現実的であるように思えた。きつと自分は病氣なのだ。もう一つ人格を作ってしまったほど壊れかけているのだ。そしてまた、自分がこうなるまで強く他人の存在に飢えていることをあらためて知った。教室では平気そうな顔を装つていても、やはり心のどこかで、一人ぼっちに嫌だと激しく泣き叫んでいたのだ。そばにだれもないことが辛くて、わたしは今、頭の中に作った自分だけの世界に閉じこもろうとしている。

怖かった。不安だった。想像の携帯電話、これはいい、何なのだろう。いつのまにか自分でもわからなくなつていた。これの正体を確かめなければいけないと思ひ、今度はこちらから電話することを考えた。

(2) 「Calling You」

— 2 —

問1 — 線①「シンコキュウ」、②「トクイ」のカタカナを漢字に直し、③「人気」の読みを書きなさい。

問2 — 線(1)「不覚」、(2)「大口」という言葉を使った慣用句(古くからの言い回し)として正しいものをそれぞれ次のア～オから選び、記号で答えなさい。

(1)「不覚」

- ア 不覚をよむ イ 不覚をかける ウ 不覚をたつ
エ 不覚をまねる オ 不覚をとる

(2)「大口」

- ア 大口をさぐる イ 大口をまつる ウ 大口をためらう
エ 大口をたたく オ 大口をうつ

問3 この物語の季節がわかる言葉を 1 より前の部分から二字でぬき出しなさい。

問4 「わたし」が学生であることを示す言葉を 1 より後の部分から漢字二字でぬき出しなさい。

問5 — 線1「そういった状況に対してあこがれにも似た気持ちを抱いていた」とあるが、この「あこがれにも似た気持ち」を抱いている「わたし」についての説明としてもっともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 携帯電話がないので友人と話ができずにこまっている
イ 友人がまったくないので携帯電話も持っていない
ウ 携帯電話では落ち着いて話ができないのでなやんでいる
エ 最近手に入れた携帯電話で早く話がしたいと思っている
オ バスの車内で携帯電話を使うほどの勇気を持っていない

問6 — 線2「偶然にもほどがある」とはどういうことか。その説明としてもっともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 期待していた相手からの電話であることが着信音でわかったこと
イ 未知の相手からの電話であることを想像させる着信音だったこと
ウ 自分が気に入っている音楽のメロディーと同じ音が鳴ったこと
エ 鳴ってほしいと願っていた着信音がひさしぶりに鳴り出したこと
オ 思い描いていた電話のメロディーが手元の携帯から響いてきたこと

問7 — 線3「靴の取っ手につけたお気に入りのキーホルダーが、カタカタ小さな音を立てた」は、「わたし」のどのような様子を表しているか。その説明としてもっともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 待ち望んでいた相手からの電話だとわかりものすごく喜んでいる様子
イ バスの中で二度も着信メロディーが鳴ったので不安を感じている様子
ウ 靴の中の自分の携帯が鳴っていることに気づきびっくりしている様子
エ 自分に電話がかかってきているらしいと思っておびえている様子
オ 携帯電話で会話するという夢がかないそうなので感動している様子

問8 1 に入るのにもっともふさわしい言葉を次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア あの一、シンヤですが
イ やっぱり君だやんだね
ウ やつと君の声が聞けた
エ いたずら電話じゃないんだ
オ 本当につながった

問9 2 に入るのにふさわしい言葉を、2 より後の部分からぬき出しなさい。

問10 — 線4「ちよっとおもしろいと思った」のはなぜか。その理由として考えられるものを次のア～キから三つ選び、記号で答えなさい。

- ア いたずら電話という言葉が現実ばなれた場面でまじめに使われたから
イ 電話の応対でいたずら好きな性格が手にとるようにわかってしまったから
ウ ちよっと前にこの電話はひよっとしていたずら電話ではないかと思ったから
エ だれかのいたずらでもないから電話がかかってくることを期待していたから
オ いたずらのようにしか聞こえない内容の言葉が電話口から発せられたから
カ 親切な気持ちからわざわざいたずらっぽく電話をかけてくれたから
キ 実際にはまったく知らない人にかけていたずら電話に近いものだから

問11 — 線5「頭の電話に語りかける」とはちがった言葉の発し方をしているところはどの部分か。その部分の最初の五字をぬき出して答えなさい(句読点等の記号は字数に数えない)。

問12 — 線6「想像で作上げたはずの電話が、あまりに存在感がある」とあるが、これとはほぼ同じ意味内容の部分をふくむ三十五字以内の一文を文中からぬき出し、その最初の五字を書きなさい(句読点等の記号も字数に数えない)。

問13 3 に入るのにもっともふさわしい言葉を次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 携帯電話をはしくて思いなやんでいる
イ 携帯電話の力にふりまわされている
ウ 携帯電話の機能に手を加えて遊ぶ
エ 携帯電話を想像の中で使いたがっている
オ 携帯電話を思い描いて楽しむ

問14 — 線7「ぼくもそう思っていた」のはなぜか。その理由としてもっともふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 自分と同じく心の中で電話をかけていた他人がいたことを知ってびっくりしたから
イ 電話の相手も自分が作り出したものであることがわかりひどくがっかりしたから
ウ 想像の電話をかけたから見知らぬ相手につながったことで気持ちがみだれていたから
エ 存在しないはずの電話に見知らぬ女の子から電話があったことが信じられないから
オ いつも気まずくなってしまう電話での会話がうまくすすまかえて不安になったから

問15 線8「だれかの頭とつながってしまったと考える」とはどういうことか。そのことを説明した次の文の

A に入る言葉を文中からぬき出して答えなさい(Aは三字、Bは五字)。

A で、 B であるシンヤと会話を交わしたと考えること

問16 「わたし」について述べた次の文章の A F に入る言葉を文中からぬき出しなさい(A、Dは

三字、Bは一字、Cは四字、Eは五字、Fは十六字、ただしFは最初の五字を書くこと)。

「わたし」は他人を目の前にすると言ひ知れぬ A におそわれてしまい、他人とうまく会話ができない。

そんな「わたし」がいつも空想しているのは B 色で、好きな C が着信音になっている携帯電話の

ことであつた。

シンヤとの電話でのやりとりは「わたし」に意外な D を覚えさせたが、だれもない家に帰ってからは、

シンヤは E かもしれないと考えるようになり、ふだんは平気な顔をしていても、実は F 自分に気

づくのである。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい(設問の都合上、本文を省略した部分がある)。

「シンデレラ」の話はだれでも知っている童話です。そのシンデレラの話に時計が出てきます。それは魔法つかいとシンデレラが、門限の約束をするシーンです。

「へかならず真夜中の十二時までに帰ってくるのですよ。十二時をすこしでもすぎたらだめですよ。もし十二時をすこしでもすぎたら、馬車はもとのカボチャに、馬はハツカネズミに、従者はトカゲに、あなたの着ているものはもとの古いよれた服にもどつてしまいますよ。いいですか。」

美しい貴族の女の子に变身したシンデレラは、わくわく、馬車に乗ってお城の舞踏会へ出かけました。ほんとに楽しい夜でした。その晩、時計が十一時四十五分の時を打つのをきいた彼女、約束の十二時まであと十五分、「早く帰らなくちゃ……」というわけで、いそいそお城をぬけだして時間におくれないように帰ってきました。

これはおとぎ話の世界ですが、よく考えてみると、この話の核心の部分は、きわめて現実的な、時間をまもるという魔法つかいとの約束です。しかもその約束には、約束の時間に一分でもおくれると魔法がとけるといふ、きわめてきびしい罰則がつけられていた点です。

どうして約束の時間におくれたら、きびしい罰をうけねばならなかったのでしょうか。

いいかえると、時間の約束は当時の社会で、どういうふうになり、人びとにうけとめられていたのでしょうか。

そもそも機械時計が出現して以後、なにがいはばんか変わったかという点、人びとの生活における時間意識です。

はやい話が、長いあいだ人びとは、朝は太陽とともに起きて野良ではたらき、夕がたは星をあとに家に帰るという、自然の時間にしたがつて暮らしてきました。そうした自然の時間を制度化したものを、「不定時法」といいます。かんとんにいうと、日の出から日没までを「昼の時間」、日没から翌朝の日の出までを「夜の時間」とし、それぞれを六等分ないし十二等分して計算する方法です。

この方法によりますと、夏と冬とは昼と夜の一時間は、それぞれ長さがちがいます。季節だけではなく、緯度によってもちがってきます。たとえばおなじ夏でも、東京と、はるかに緯度の高いロンドンとを比較すると、ロンドンの夏は午後十時になってもまだ明るさがのこっていることから、わかるでしょう。

A、機械時計がつくる時間は、人工の時間であつて、季節や緯度がどうあれ、昼も夜も一時間の長さはおなじで、かわりません。これを「定時法」と呼んでいます。

ここで注目すべき変化が起こったのです。

それは機械時計の出現と普及によって、ヨーロッパでは不定時法から定時法へ時刻制度が変化していったことです。つまり人びとの暮らしが、自然の時間とリズムにそつた暮らしから、機械時計のつくる人工の時間にしたがつた暮らしにかわつてゆくのです。

自然の時間とリズムにそつていくなまれる社会では、職人の仕事といへば、何時間かろうが何日かろうが、時間のことは気にせずに、自分でまんだくできるまで良い作品づくりに精魂をかたむけることでした。それこそ職人気質といふものです。つまり仕事の目的は、あくまでも良い作品をつくることにあつたのです。

ところが、人工の時間の成立とともに、仕事の性格はしだいに時間にしばられた賃労働へかわつてゆくのです。すなわち良い作品をつくるのが仕事であつたのが、時間労働によつてえられる一時間いくらという賃金をかせぐことが、労働の目的になつてゆくのです。

ここでたいせつなことは、仕事が一時間いくらというように、時間がお金にかわつてゆくことです。

時間がお金になること、それを「タイム・イズ・マネー」といいます。この言葉は、ずつとものちの十八世紀はじめ、アメリカのフランクリンがいった言葉として有名ですが、じつは機械時計の出現以来、人びとの仕事の考えかた、時間意識の変化のなかで、「時が金」という現実がつくられてゆくのです。

そうした現実がつくられてゆく過程で、資本主義がうまれてくるのですが、なにが大きくかわるかという点、時間の支配者がかわつてゆくということです。このことは時計と時間の歴史をみるうえで、また現代の時間のすこしかたを考えるうえでも、ぜひ心にどめておくべきたいせつなことです。

宗教はどの宗教でも、それぞれ独自の天地創造、終末観をもっています。

キリスト教の天地創造は、『旧約聖書』の「創世記」の冒頭にのべられています。それによると、神は混沌から、光

と闇、水と天、陸と植物、太陽と月と星、魚と鳥、獣と人間を六日間をつくり、七日目は安息の日としました。太陽と月と星をつかった神は、時間をつくったといえどもよいでしょう。

その神の時間を知ることは、時間をはかることであり、それはまた暦をつくることでもありました。そのためには星の出現を予知し、月と太陽のサイクルをはかるといった本来天文学にぞくする作業がひつようでした。

こうして農民たちは、一年のうちいつ種子をまいたらよいか、またいつ収穫したらよいかといった情報を、神の時間表である暦によってえたのです。

天文学的時間をはかるのと並行して、みじかい時間をはかるひつようがありました。その場合は、古くから日時計とか、水時計、ろうそく時計、砂時計がもちいられていました。夜明けにはしばしば雄鶏が時を告げてくれました。つまり神の時間というのは、自然の時間のことです。

神が時間を支配していたといっても、その支配者は具体的には神の意志をつたえるキリスト教の教会でした。ところが、長くつづいた安定的な神による時間支配に動揺をあたえる勢力がタイトウし、それまでの時間にたいする考えをゆるがす事態が起こってきたのです。

それは中世における新興商人階級の成長であり、とりわけ彼らがいとむ高利貸し（高利を取る金貸し）という事業が問題をひき起こすことになったのです。

いったい金融業者や商人が他人に金を貸して、一定の期間ののち、元金とともに一定の利子をうけとるという行為、それはいまだにだれもがうたがうことのないビジネスです。

たとえば一万円借りて、一年のちに利子千円を支払うとします。ところが、一万円借りたなら、かえすときにその借りた一万円ではなせいけないのでしょうか。千円という利子はどこから出てくるのかといわれたら、みなさんならどうこたえるでしょうか。

これは率直にいうと、今日の経済学でも論争があつて、かんたんにはこたえられない難問です。中世の知識人もはたとこまつて、利子をとることを正しいと認めないばかりか、道徳的にゆるされない行為であると決めつけました。

それではどうして道徳的にゆるされないのか。そこで教会が考えた理論は、「利子」は神のものである「時間」を盗んだ結果、うみだされたものである、という論理でした。神のものを「盗む」というならば、非道徳的行為どころか、それは犯罪行為です。

犯罪行為ならば、これを罰しないわけにはいかない。というわけで、教会は商人の利子取得をきびしく禁止した「利子禁止法」を制定したのです。

「利子禁止法」によって、金貸しや利子がなくなったわけではありません。キリスト教徒はともかく、とくにそうでないユダヤ人はこれにしたがうひつようはないので、金貸しをつづけていました。

それはともかく、ここで注意してほしいのは、「時間が利子をうむ」という新しい考えかたです。やがて商人たちは、その時間の論理を自分たちの金もうけのために役だててゆくことになりました。商人のもとで「時間」は、たんに利子をうむ要因にとどまらず、金銭そのものであるという新しい考えにかわってゆくのです。そのときの時間は、もはや「神の時間」ではなくて、「商人の時間」に転換した時間です。

「B」とは、「C」ではなくて、まさに機械時計のつくる「D」であり、近代的抽象的時間なのです。中世末、ヨーロッパ各地の都市の市庁舎にとりつけられた時計塔、これはまさに「E」に對抗する「F」のかがやかしいシンボルだったのです。

それでは商人がその支配した時間によって、人びとの暮らしや労働をどのようにきびしく規制するようになるのでしょうか。もつとも経済活動がすすんでいたイギリスの事例についてみてみましょう。

経済活動がすすんでいたイギリスでは、商業や貿易活動のほか、どこの国よりも早く、資本家と、そのもとでやとわられて賃金で暮らす賃労働者の二つの階層がうまれていました。このやとものやとわれるものとの関係を資本賃労働関係といい、やとものを「資本家」または「ブルジョワ」といいます。

ところで、イギリスでは、労働者の賃金や労働条件を、全国的に定めた法律が早くも十六世紀中ごろに出ています。一五六三年に制定された「徒弟法」がそれです。この法律には労働時間がつぎのように定められています。

へすべての職人および労働者は、三月中ごろから九月中ごろの期間では、朝は時計のしめす五時または五時前に仕事につき、夜は時計のしめす七時と八時のあいだまで仕事をづけるべし。ただし、朝食、午餐（昼食）あるいは飲酒の

時間を除く。その時間はおおくても一日に二時間半をこえてはならない。……それに違反したものは、怠惰（たいた）一時間につき一ペニーを賃金からさしひかれるべし。注

この法文で注目すべきことが、さしあたり二つあります。

ひとつは、労働時間が朝は五時から、晩は七時八時までとはつきり時間によってしめしてあり、しかもわざわざ「時計のしめす時間」と明記してあることです。

もうひとつは、おどろくべきことには、仕事ちゅうにさばれば、一時間につき、一ペニーさしひくというひどい罰則規定がついていることです。その罰則がいかにひどいものであったかは、当時の労働者の日給がだいたい六、七ペンスであったことをおもつと、想像がつくでしょう。

かつて神が時間を支配していたときは、「利子」をとる商人が非難され罰せられました。しかしいまや、商人、ブルジョワが時計で時間を支配するようになり、仕事をさぼるものにたいしては、賃金カットの制裁がくわえられるようになるのです。

このきびしい現実には、気分には仕事に精をだし、やる気がしなければ休んでいた職人たちにとつて、大きなショックでした。毎日かせぐ賃金に生活がかかっていた労働者は「仕事のはじまる時間におくられたり、仕事の途中で怠けることはゆるされません。」注

そうした新しい社会の誕生と新しい時代の生きかたが、ようやく人びとの関心をあつめつあつたのが、十七世紀後半です。

そのころ、イギリスではリチャード・バクスターというひとが、時間は貨幣とおなじようにたいせつであるから、毎時間毎分をむだづかいしないように、もつとも自分の役にたつようにすごさない、と人びとに説いていました。また時間を、お金とおなじように儉約し貯蓄しなさいといつて、時間を惜しんで仕事にはげむよう勤勉の徳を説いていました。

そういわれてみると、みなさんはシンデレラと魔法つかいとの時間の約束も、なるほどそうした社会的背景があつたのかということがわかるでしょう。

シンデレラは門限の時間におくれました。そのために魔法がとけるといふ罰をうけました。にもかかわらず、王子さまと結婚できるという幸福をつかんだのです。

それというのも、シンデレラが身も心も美しいひとであるというおとぎ話であつたからこそで、一般の労働者や人びとにとっては、時間におくられると、賃金をさしひかれたり、ときには解雇されるというきびしい現実があつたのです。

（角山 栄『シンデレラの時計』）

注 ベニー・ペンス：お金の単位、ペンスはベニーの複数形

問1 くく線a「野良」の読みを答えなさい。また、くく線b「アンソク」・c「タイトウ」を漢字に直しなさい。

問2 くく線d「いったい」・e「はたと」の意味としてもつともふさわしいものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|-------------|--------|---|--------|---|------|
| d 「いったい」……ア | いつも | イ | けつして | ウ | そもそも |
| エ | まして | オ | まるで | | |
| e 「はたと」……ア | 思いがけず | イ | 軽々しくも | ウ | 仕方なく |
| エ | なすことなく | オ | 予想どおりに | | |

問3 本文中には次の一文がぬけている。入る直前の六字を答えなさい（句読点等は字数に含めない。以下同じ）。

このようにしてつくられたのが、ルネサンス時代のミケランジェロの「ダビデの像」、日光東照宮の左甚五郎の「眠り猫」をはじめとする、名工・名人といわれる人たちの銘作、銘品です。

問4 線1「約束の時間に一分でもおくと魔法がとけるといふ、きわめてきびしい罰則」とあるが、具体的にどのような罰則であつたか、その説明部分を本文中から一文でぬき出し、最初の三字で答えなさい。

問5 — 線2「夏と冬とは昼と夜の一時間は、それぞれ長さがちがいます」とあるが、年に二度ある昼と夜の一時間の長さが同じ日を何というか、解答らんに合うように考えて答えなさい。

問6 A にはどのような働きの語が入るか、もつともふさわしいものを次のアイオから選び、記号で答えなさい。

- ア 話題が転換することを示す語
イ 順当な結果が後に来ることを示す語
ウ 前のことからの説明や補いを示す語
エ 逆のことが後に来ることを示す語
オ 並べたりつけ加えたりすることを示す語

問7 — 線3「人工の時間の成立」とはどういうことか、次の説明文の ア イ に入る語を本文中からぬき出して答えなさい。

人工の時間の成立とは、時刻制度が ア から イ へと変化し、人びとの生活に定着したことを意味する。

問8 — 線4「神の時間」を商人たちから守るために定められたものを本文中からぬき出して答えなさい。

問9 — 線5「彼らがいとなむ高利貸しという事業が問題をひき起こすことになった」とあるが、このことから引き起こされたことがらについて述べた次の文章の空らん(ア)イに入る語を本文中からぬき出して答えなさい(空らんの数はそれぞれの字数を示し、同じ記号には同じ語が入る)。

時刻制度とは別に時間の支配者という考えがある。時間を作つた(ア) は、長くその支配者であった。キリスト教会は、(イ) の恩恵を受けていた(ウ) たちを激しく批判した。しかし、時代はキリスト教会の意に反し、「時間が(イ) をうむ」という考え方がより進んでゆき、「(エ) 」という現実を生み出していく。(ア) のものであった時間を(ウ) が奪い、ついには彼らが時間の支配者となつていくのである。

問10 B F に入る語を次のアイエから選び、それぞれ記号で答えなさい(同じ記号を二度使つてもよい)。

- ア 自然の時間 イ 人工の時間 ウ 神の時間 エ 商人の時間

問11 — 線6「新しい時代の生きかた」とあるが、この生きかたにもつともふさわしいものを次のアイオから選び、記号で答えなさい。

- ア 舞踏会を楽しむ貴族風の生きかた イ 神の時間表である暦通りの生きかた
ウ キリスト教の論理に従つた生きかた エ 時間を惜しんで仕事にはげむ生きかた
オ 自然の時間とリズムにそつた生きかた

問12 — 線「早く帰らなくちゃ……」とあるが、筆者はシンデレラの行動をどのように考えているか、次の説明文の に入る語を本文中からぬき出して答えなさい。

筆者は、シンデレラの物語の主人公の行動には、当時の人々に求められていた という社会通念がその背景にあると考えている。